市長賞

ピースを求めて

岡村直子

(1)

横長の座卓は2つの引き出しと、その右手に開きの物入れがある。なんの変哲もない物だが、ヒノキづくりでビクともしないのが唯一のとりえと言えるかもしれない。その上にパソコン、右側に固定電話が置いてあり、それでいっぱいである。

ヒロミはパソコンのキーボードを操作していた。その時固定電話のディスプレイが点灯した。四角い囲いにヨウコの名が踊りでた。触れそうな位置にある電話。呼出しの音が鳴る前に受話器に手を延した。

ひさしぶりの弾んだヨウコの声が聞こえてきた。ヨウコとは、ある仲間で何かとつっこんだ話をしている。

―ハリに行って7回目になるのだけど、このごろ続けて歩けるようになって…

以前はたしかにこう言っていた。

―このごろ草の生えるのが忙しいでしょ。花壇の草取りをしているのだけど、抜いても抜いても次々に生え

てくるし、その日はいつになく長い時間やれたけど。それがね、庭仕事が終わると膝が痛くなって続けて歩けなくなっちゃったの。

その後も、膝の調子がよくないの。どうもあの庭仕事が原因らしい。と気落ちした感じで言っていたことを思い出した。

2年ほど前のことを思い出す。その時にはこう言っていた。

ヒロミが体をこわして、ある鍼灸整骨院へ通っている話をした時、ワタシも行きたいのだけど…。とハリ治療に関心を示していたヨウコがいた。

そうか、とうとうハリ治療に通い始めたのか。そんなことを思いながらヨウコの話に耳を傾けていた。まだ話は続きそうなので居ずまいを正した。

―治療はカーテンでひとりひとりが区切られているのだけど、ベッドに寝ていると隣の話が聞こえてくるでしょう。

受話器から流れてくるヨウコの話に、だんだん神経を集中しなければいられなくなった。紡ぎ出される内容が、思いがけない方向に行ったからだ。

話とは、ヨウコの隣のベッドで受診している患者とセンセイの会話であるが、それは次のような内容になっていった。

ハリ治療のナカダセンセイは、ヤマナカという山村の出身らしい。ヤマナカ、三角屋、モリタニ饅頭屋等の固有名詞が次々に飛び出し、それらがベッド上のヨウコに飛んでくる。ヨウコはそれらの名前をそのまんまヒロミに投げてきた。聞いていると、どうもヒロミに関係あるらしいことがわかってきた。しかし、ヨウコの話が一段落するまで、ひたすら耳を傾けていた。

ヨウコには青春のころから山の仲間が数人あった。

ある時、その仲間と車でF市の奥に向かっていた。その時、車はヤマナカという所を通りかかっていた。車

の中から見た外の景色の様子が、タテゾエに似ているとヨウコは感じた。

ここで少々、ヨウコの幼い頃に遡らなければならない。

S市のタテゾエはヨウコの父親の実家だった。そこには祖母がいた。祖母は物知りで、ヨウコの訊くことに何でも応じてくれた。それが楽しく、うれしく、祖母逢いたさにタテゾエに行くことが多かった。

利発なヨウコがおかっぱ頭の髪の毛を掻き分けながら、祖母に問いかけることは、あたかも乾いたスポンジがそうであるように、グングン吸収する。タテゾエの古くからの習わし等、さまざまなことを訊くことも多かったし、そのひとつひとつが耳新しいことだった。ヨウコは祖母から訊いたことを、風呂敷いっぱいに詰めるようにして家へ帰った。

今のヨウコがあるのも、そうした祖母の影響がかなり大きいし、かけがえのないことだと思っている。

ヤマナカという場所が、どこかタテゾエを思い出させる雰囲気があったのだろうか。ベッドのヨウコの耳に突然飛びこんだ、ヤマナカというその地名が。

ヒロミがそのヤマナカ出身であることをヨウコが知ったのは、つい最近のことだ。それでヒロミにその話をはじめたのではないか。とようやく納得した。

ヨウコからその話を聞くヒロミには、ふつうの会話で通りすぎる内容のものではなかった。何といっても、そこでヒロミは生まれ、20数年間を過ごしてきたのだ。簡単なはなし、そこはヒロミの生まれ故郷である。

もの心ついたころからも、成人を過ぎるあるときまで、ヒロミの躰には凝縮された田舎、ヤマナカのいろんなコト・モノが詰まり、簡単には素通りできない。特に小学校のころの思い出は、多くの者たちがそうであるように、並べたら果てしがないだろう。

そこを去って幾年、今ヨウコが語っている懐かしいヤマナカという固有名詞は、いちいち心あたりがあり、それらが、あの手品のシルクハットからポンポン飛び出してくるようだった。

しかし、ことは単にヒロミがヤマナカの出身という記憶だけの理由だったことではない。問題はすでに、思いがけないことから始まっていた。それは、ナカダ治療所のセンセイがヤマナカの出身だということだった。もちろん、そのときナカダ家は治療所でなく、サラリーマン家庭だったらしい。

いつの頃からかヒロミはナカダ家のことはとんと忘れていた。いわゆるナカダ家というピース（ｐｉｅｃｅ）が記憶から飛んでしまっていた。ヒロミは当時のヤマナカのことを思い出すように視線を遠くに移した。

Ｓ市をひたすら北上する。いくつもの橋を通り抜けると、ようやく道路がふたつに分かれるところに至る。そこがヤマナカという所だ。当時その突きあたりに三角屋と呼ばれる店があり、駄菓子等幅広く商っていた。またバス停でもあることから、いつも人の動きがあった。そこを真っすぐ行けばオキミの滝に行くことができる。その道をＡとする。かつてヒロミが住んでいた通りで、三角屋から20メートルくらい先にヒロミの家はあった。逆に三角屋と呼ばれる店から、タキシタ方面の通りをＢとする。言ってみれば、三角屋はその名のとおりＡとＢの三角の起点に当たる。

ヒロミは当時、ナカダ家のあった家を頭の中で描いた。多分、三角屋のとなり辺りにナカダ家はあったと思うのだが、その間にまだ住まいか倉庫のような建物があったような気もする。昼でも薄暗い、犬か猫が尻尾をふりながら通ったり、あるいはやっと子どもひとりが通れるくらいの暗い径、というより隙間があった。回りみちをしないよう、子どもらが勝手な無頓着さで通らせてもらっていたようなところなのだ。そこを通ったこともあったような気もするが、判然としないものもある。半分切り取られたように、ぼやっとしているのだ。なぜだろう。わからないまでも続けてその後を追ってみる。

ヤマナカのＡ通りもＢ通りもイナカギンザと呼ばれたように、商い屋が並び、ふつうの生活はそれらの店でおおまかに間に合うようになっていた。

ナカダ家のないＢ通りをイメージして歩いてみる。商いをしない家が一軒あり、その隣にアイスキャンディー屋があった。キャンディーというと、当時は先の長い棒状のキャンディーだった。

備えつけの大きな冷凍庫があった。内側が氷ついて白っぽくなっている大きな箱がいくつか並び、箱の中に何色かのキャンディーが入っている。キャンディーを買いに行くと、店の小父さんや時にはおねえさんが、台の上に乗って箱の蓋を開ける。台は固定してないのか乗る度にドタンと大きい音がする。

蓋を開けると白い冷たい煙のようなモクモクが中から立ち上がる。その煙のような気体をよけながら、中からキャンディーを取り出してくれる。それは浜辺で、玉手箱の蓋を開ける浦島太郎のお爺さんのようだと、そのころヒロミは感じた。

その先にある魚屋さんには、よく母親について行った。ときには母に頼まれ、ひとりで刺身とかも買いに行くこともあった。

土間がコンクリートで広く、魚のある所とか魚を料理する流し台の所は、いつも水で濡れていた。細身で背の高い小父さんも、でっぷりとした小母さんも気さくでいい人だった。その家には子どもがいないようだった。

その後ヒロミの耳に入ってきたのは、戦争でたったひとりの息子さんを亡くしたということだった。そういう悲しさを、表面ではあまり感じさせない小父さんと小母さんだった。

その隣には鶏肉を商うトリ屋という屋号の家もあった。そのまた先には豆腐屋もあった。この家は最近まで三和土の土間で豆腐屋を商っていたらしい。その手前にはヒロミの同級生の家と、親同士が親しくしていた家もあった。それはすべてB通りにあり、パズルのように並べることができる。

求めるナカダ家はその反対側にあった。確か、魚屋さんかトリ屋さんの前あたりにあったはずだ。はずなのだ。

そこで突然白色が飛びこんでくる。白色といえばヤギである。森の子ヤギのメエメエのヤギさんだ。

ナカダ家にヒロミより一歳年上の女の子がいた。スミコという名だった。ナカダ家より先に行くためにはそこを通っていかなければならない。真白でスマートで触れたくなるヤギ。そのヤギは木製の棚の中にいた。ヒロミはヤギを見るといつも足止めをくった。ヤギはヒロミを見ると友達のように近寄ってくる。ヤギは動物で

もおとなしく危害を加えないと、子どもながら知っている。ヤギと至近距離で見つめあった。クリクリしたなんともいえない愛らしいその目に、ヒロミはこう言った。

―ワァッ。ドングリが入ったみたいな目。

両目のつぶらな瞳が印象的だった。印象的なんていうものではない。もっともっと強烈だった。疑うことを知らない純な目。そうだ違いない、ドングリのような目でなく、ドングリが入ってしまった目なのだ。今思えば、むしろドングリより大きい目だったのではないか。半世紀以上も前のことが、今でもリアルタイムに蘇ってくるのが、ヒロミは不思議である。そのためか、ドングリを見ると今でもその言葉と情景が蘇ってくるのを覚えている。

そのずっと後年、ヤギの目は赤くて怖い。とかいうことも聞こえてくるが、ヒロミが見たヤギはただ可愛いいだけだった。

そのヤギからナカダ家の位置がはっきりしてきた。しかし、それにしてもなぜ、ナカダ家がぼんやりしてしまったのか。それには理由（わけ）がありそうだった。ありそうではなく、実はあったのだ。

それは、ある時からいなくなったのだ。いわゆる引っ越したのだ。いつ引っ越したのかわからない。風が吹くようにサアッといなくなったのだ。

知らないということは関りがない。ことだったのだろう。スミコと一緒に遊んだという記憶もあったかなかったか。それも判然としない。親しい仲だったら、別れるときに子どもなりの儀式もあるはずなのに、それもなかった。

ヨウコからナカダ治療所の話を聞いたとき、ナカダ家がいつあそこから消えたのか、むしょうに知りたくなった。それはヒロミの内面を削るように、性急なものだった。

それが、ナカダ治療所へ通うきっかけになった。

(2)

家にいるとき、サッシの窓から何度も海の方面の空の様子を見た。雲間からだんだん青空が顔を出してきた。天気は快方に向かっている。この分ならだいじょうぶだろう。ナカダ治療所へは、午後2時の予約の電話はすませてある。

家を出たときも同じように空は明るかった。ところが15分くらいたち、電車がF駅に近づくころ、周りの景色がだんだんグレーになってきたのにヒロミは気がついた。テレビの天気予報どおりになってきてしまった。シマッタ、やはり判断が甘かったのだろうか。しかし今さら戻ることはできない。走るカゴの中にいるようなヒロミ。電車の走るに任せるしかない。

いつの頃からだろうか、ヒロミは雨降りの外出が苦手になってきた。しかし、若い頃は雨の外出は嫌いではなかった。というより雨も好きだった。傘を打つ雨の音も心地よく、曇ったどんよりした日よりむしろ楽しく、心が浮くという気持があった。ホコリが雨で洗い落され、目にする木々の緑がいっそう鮮やかだ。

そういえばハリウッドのミュージカル映画に『雨に唄えば』がある。その中の同名の挿入歌をヒロミは思い出した。雨傘と黄色のレインコートで雨の楽しさを実に楽しく表現しているのが印象的だった。

ところがいつの間にか、雨はうっとうしいものに変わっていたことにヒロミは気がついた。それがいつからかわからない。雨降りの外出が苦手になってきたのはなぜだろう。

考えると実に現実的なことにあるようだ。雨の日は車の運転がしにくい。視野が狭くなるので注意することも多くなってきた。そのためかもしれない。それにあまり触れたくないが、雨が楽しいという、そういうロマンが除々に失われてきたのかもしれないのだ。多分そうかもしれない。そう思うと、ますます気が滅入るのをヒロミは感じた。

この日にとって迷惑な雨は、ヒロミにふいにあることを思い出させた。そうだ、あの有名なナスカ地上絵の

ことだ。

どうして、何のためにナスカの絵は描かれたのか。わからないまま、欲求不満のように謎を残し地上絵の番組はいつも終わっていた。ところがこの間は思いがけないことを語っていた。聞いたときは、頭を強くガツンとなぐられたような思いがけない内容のものだった。

ナスカ地上絵は、雨乞いのために現地人が描いた。という説明だった。なぜここまで残ったかというと、永い間、雨が降らないから絵が消えない状態でいたという。それほど雨は降らないのだろうか。その理由だけで大きな不思議はヒロミの中で、とうてい払拭できないでいる。それほど地上絵は、途轍もないものを残してくれている。そんなことをアレコレ途方もなく考える。

電車はF駅に滑りこんだ。改札口を出てすぐ左手を歩くと長いエレベーターがある。

数年前、駅がリニューアルしてから初めてこの駅に立った。新しい店も構え、すべてが初めて見る光景だ。知らない初めての駅、よそよそしい駅に踏みこんだという感じだ。

ところが初めてではなかったのだ。実は一度だけ来たことがあった。そのことを思い出した。

ある時、知人Tから電話があり、駅に隣接したビルの中のある店に来ざるを得ないことがあった。

知人の言うところによると、このビルのある一室でステーキ店を営む職人は、旧い知り合いの縁のある人だとか。とに角急いで！　という電話で、取るものも取りあえず。ということばの通り、急いで車を走らせて来た。何かあったのか知人はいつになく身形を整えていた。それは、日常を少し破ったお洒落心と言ってしまえばすむだろうが…。

その時、すっかり変貌した駅ビル・その周辺を驚く気持で眺めたこと、あのステーキ店のことなど、ヒロミは今でも鮮やかに覚えている。

今回は電車に乗り、改札口を通過して来た。雨は遠慮なくバシャバシャ降っている。覚悟を決め、折り畳み傘を開き歩き始める。

初めて向かう治療所、住所で場所を確認したもののなぜかおぼつかない。パソコンから引き出した地図を見ながら、片手に傘をさす。雨は止む気配どころか、むしろ本降りになっている。

そんなとき、後方から女学生がひとりで歩いてくるのが視界に入った。紺の制服をキチンと身に着け、容姿も優れ模範生のようだ。路を訊ねるだけでは十分すぎるくらいの女学生だ。一呼吸おいてその女学生に近寄った。

―すみません。お聞きしますが…。

地図で治療所のすぐ傍にあるというPパン屋を訊ねた。その界隈では名の通っている大きなパン屋さん。若い人なら、治療所よりパン屋の方がいいと思った。

―この路をまっすぐ行くと信号機があって、その歩道を渡ってから右に行くとパン屋さんがあります。

案の定女学生はわかりやすく教えてくれた。パン屋が解ればしめたものだ。求めていた治療所はその先にある。

ヒロミは雨が降っていても気にならなくなった。歩いていると、駐車場も広い確かな西洋風のPパン屋が現れた。午後のその時間帯はパンを焼いているような匂いはしなかったものの、ふと寄ってみたい気がする店構えだった。12月の第一土曜日は1割引します。と書かれた紙が、店の表のガラス戸に目立つように貼ってあった。

そこを通り過ぎると店の裏手から、白いハットに黒い短めのタイの女性がかいがいしく出て来た。ゴミ箱のところに来たようだった。

「ナカダ治療所」と書かれた大きすぎない、かといって小さすぎない看板がその数軒先に見えた。ようやくほっとして、緩めながら歩みを続けた。

数段ある階段を上がり玄関に入る。治療所は無言でヒロミを迎える。玄関には何足かの靴等が行儀よく並んでいるが、待合室には患者はいない。予約制で履物の主たちは、ドアの向こうのベッドに横になっているだろ

う。

待合室の壁にはハリ治療の意義とか、心がけ等が紙に書かれて貼ってある。置かれた長椅子の対面には畳の待合もあり、子どもがくつろげるスペースもある。

しばらくしたら、受付の若い感じの女性が奥から出て来た。この女性が奥さんらしい。いらっしゃいませ。と言うと出しておいた保険証を手に取った。最初に電話したとき応待してくれた女性だと思う。そのとき紹介者の片桐ヨウコの名を先ず言った。

やがて奥から青い上着の男性がいそいそと小走りで現れた。受付のガラス越しでこの人がナカダセンセイか、と確認した。芝居の主役なら、ここでマッテマシタ。という重要な場面かもしれないが、静かな無言の空気が無表情にスーッと流れた。

センセイと思われるその人は、中肉中背、髪には白いものも混じり、思ったより年配者という感じがした。考えれば70才くらいになっているはずで当然と言えるだろう。ヒロミは自分の年齢を考えず、一体センセイがいくつになったと考えているのだろう、とそのことを骨稽に思った。もちろん当時の面影はない。というより初めてお目にかかるのだ。まだ小学校低学年であった当時のその少年。すれ違っていたかもしれない子どもA・B君にすぎないから記憶のありようもない。いきなり目の前に現れるのだから、そのギャップは埋めようもない。

やがて名前を呼ばれ、カーテンで仕切られた3番と書かれた部屋の中に入る。白いカーテンで仕切られた部屋は10ある。

ヒロミはナカダ治療所以外に、過去3ヶ所くらいハリ治療に通ったことがある。しかしここ、ナカダ治療所は部屋の隅々まで清潔感が漂っている。

用意してあるトレーニング用の半ズボンに替える。左側の枕元に多量の銀色に光った極細短めのハリ。それらが容器にいっぱい並べて入り、鋭利な銀色の光を放っているのを横目でチラッと見る。

ベッドに横になると頃合いを待つように、先の女性が静かに現れる。両ひざを立てるよう手で促し、2枚の座布団で姿勢を整える。冬には火傷をしないほどに熱を加えた大きなカイロを複数持ってきて、足先や手に添える。そのようなことがテキパキと進んで行く。ハリをさす部位に消毒もされる。間をおかずしてセンセイが現れる。かんたんな問診と同時に先ず左右の手の脈を診る。それからおもむろにハリ治療が始まっていく。

問診の後、ここまでどのような手段で来るか、とか連絡がつく人も訊ねられる。あとからセンセイから、連絡のつく人のことは聴いておかなければならない。というようなことを言われた。病院等とくに手術などというときはそういうことがついてまわる。当然のことだろうが、ヒロミは今までにそのことを何度も痛感している。それは越えることのできない関所のようなものであると感じる。しかし、一人身のヒロミには頼める人もいない。辛いことなのだ。これでは病気も入院すらできないとつくづく感じている。

天井を見つめるようにして、いくつものハリを腕と足にさされる。自然に眼を閉じるようになる。ハリをさされるごとに躰が反応し、ビクッとするが、そのビクビクはハリをさす度につぎつぎに起る。予定のハリがすべて皮膚にささったらしく、躰に薄い布が数枚掛けられ、40分か50分くらいお休みください。とセンセイはそう言われ、静かに後ろ姿を見せる。同時に後手で白いカーテンがスルスルと閉じられ、明りが消される。次にセンセイが現れるまでハリをさされたまま、思考の時間となる。眠っても構わない。休むにはそのくらいで丁度良いかもしれない。

やがて明りがつけられセンセイが現れる。次にベッドに腰かけ、背中にもハリがさされるが、それは短時間で終わる。およそそのようなことがワンフレーズで行われる。

治療を受けながら、目的はこれだけではないと思うヒロミがいる。別な目的がもう一つあったはずだ。しかし、ハリ治療はそれに関係ないようにスムースに進んでいる。

初めての日、診療が終わり会計を済ませた後、受付で少々お待ちください。と言われた。しばらく待つとセンセイが奥から現れ、ソファーのヒロミの横に座った。

数日前の予約の際、ヒロミは名前を述べ紹介者の片桐ヨウコの名と、昔センセイのいらしたヤマナカと自分が同郷であることを伝えておいた。

―ホサカさんはどのあたりの家でしたか。

―タニザカという日用品を扱っていたその前の家です。

―ああ、やはりそのあたりだったのですね。

センセイはそう言われたが、それ以上は問わなかった。

次にヒロミは思い切って訊ねた。

―センセイのファーストネームは何と言いますか。よかったら書いてもらっていいですか。

ヒロミは紙を差し出した。「博己」とセンセイは書いた。「ヒロキ」と読むと言われた。ヒロミより5歳下というセンセイの当時の顔がどうしても思い出せない。名前を知ることで思い出すかもしれない。と思ったものやはり効果はなかった。センセイの存在すら知らなかったのだろうか。質問の内容を変えてみた。

―センセイはお父さんとお母さんとどちらに似ていますか。

―自分で言うのも変ですが、父は母と違っていい顔立ちをしていました。ところが3人の子どもたちは揃って母親似なのです。

そう言うとセンセイは苦笑した。ヒロミも何となくその笑いに連れこまれた。次のことばに瞬間つかえたので、笑いで時間をかせぐつもりもあったのだろうか。小噺みたいにいつまでも笑ってはいられない。

そのときふとセンセイのふたりのお姉さんが浮んだ。カバンを持ち、女学校に通う長女のお姉さんが、髪を風になびかせている。顔も何となく思い出したような気もする。センセイの言われるように、なんとなくお母さんの面影がする。丸顔のお姉さんのセーラー服のリボンが胸元で踊っていた。

それからはしばらく単調な日が続いた。ヨウコが時たまヒロミのところへ電話を入れて来ることで知ったことは、センセイは以前、他のところでハリ治療所を開いていたこと、ヨウコにハリを紹介してくれたのは、ム

トウという友人で、ムトウは又センセイとも親しい関係にあるらしいことも。
元々ムトウ夫人はセンセイの患者だったという。夫人は危い病を助けられ、現在はムトウ夫妻ともどもセンセイの治療所に通っていること、ムトウはセンセイの信望に浴していることもヨウコは詳細に語った。ヒロミにはすべてが耳新しいことだった。
ヒロミとヨウコは逢うことは滅多にない。またナカダ治療所で顔を合わせることもない。同じ日に同じ時間に予約すれば、あるいは顔を合わせることも可能かもしれないが、それもない。
膝の痛みもすっかり忘れた。とヨウコから聞いたのもそんな中でのことだった。毎週1回を月に2回くらいにしたいことをそのうちにセンセイに相談する。この間は電話でそう語っていた。
ハリ治療は体内の血液の循環を良くすること、それが万病の素である。という、その程度のことくらい素人のヒロミもいつしか知らされていた。そのついでにボケ防止のためにも、美人になるようにハリを頭のどこかにさしてもらおうかしら。そんなこともヨウコと冗談を言いあったりした。
ところでヒロミは自分のことも考えた。自分は手術を何回も受け、躰がボロボロでヨタヨタしていることは変わらない。さりとて今すぐ何かをしなければならないわけでもないような気がする。消えたピースの追跡ができたことで、当面足踏みしてもいいかもしれないが、ハリ治療が計算しない何かをヒロミに与えてくれるかもしれない。ハリ治療をもう少し続けてみようかと思った矢先、考えられない悪戯なようなことが起きたのは、不思議なことだった。
それは一冊の本だった。ヒロミは自身が著した本を失礼と思いながら、名刺代わりにセンセイに渡した。それがセンセイのどこかを刺激したらしい。センセイは感想文と称し、A4の用紙9枚に思うことを綴り、それにセンセイ自身で著した本を添え、ヒロミに渡した。それらはあっという間の素早さでヒロミの目の前で行われた。
渡されたその本の表紙の副題に―私のモオツアルト論―と書かれてあるのを見て、ヒロミには厚い本が、哲

学的な内容であることを感じた。

ある時電話でヨウコはこう言った。

―治療の時にネ、センセイは「美しいヤワハダにハリを打たせたていただきます」て言うの。そのうちにヒロミさんにも何か言うと思うよ。

ヒロミは思った。ワタシはヨウコみたいに美しいヤワハダではないから、センセイは言葉選びに困るのではないかと。

それからしばらくしてのことだった。あるときヒロミは袖口を折ることが生じた。そのときセンセイはこう言った。

―すみませんね。パリコレの洋服が痛んでしまいますけど。

思いっきりの無理をしたなあと思った。しかし、そういう言葉遊びがよく考えつくものだと思ったが、消化不良のようにヒロミは低く笑った。それはセンセイ独特のおしゃれなジョーク、はたまたセンセイのハリ哲学だろうか、と思うことにした。

回数を重ねる度に、薄皮を剥ぐように、センセイの知らない面が飛び出してくる。そんなとき、遠くからなにかかぼそい声のようなものが聞こえてくるような気がするが、あれは気のせいだろうと思うけど。

(3)

そうだ、思い出した。ヒロミがナカダ治療所に通い始めたある日、ひとつの電話が入った。思ってもみない人。その人はスミコさん、センセイの直ぐ上のお姉さんだった。直ぐ上といってもヒロミより一学年上、センセイとは7歳くらい違うだろう。

ヤギの柵の所で何気なく、少女同士の話をして以来のことになる。そのとき、どんな話を交したかは記憶に

ない。実に半世紀以上、いやそんなものではない。それでもその昔会話したというだけのことだが、そこに地下水のように細々と、清流が存在していたのだろうか。何の衒いもなく、スーッとあのときの幼い世界に入っていく心の豊かさ、と言ってよいだろうか。ヒロミはスミコと昔話をする中で、ヤギのことに触れることを忘れなかった。すると、スミコは思いがけないことを言った。

―ヤギを飼ったのはミルクを絞るためだったのよ。おかあさんのお乳の出が悪かったのでヒロキに飲ませるためだったの。

ヒロミは初めて聞くその理由(わけ)に再び頭をゴツンと殴られたようなショックを覚えた。そうと聞くまで、全く思いつかなかったヤギの存在。

―だったら大変だったね。餌を確保するために。

―ワタシはよく草を採りに行ったのよ。

当然のことのようにスミコは言った。

―それは大変だったね。それでヤギはどんな草を好んだの。どんな草を採りに行ったの？

その質問にスミコは草の名前は忘れてしまったけど、とあっさり言った。ヤギの餌を採りに行くという日常が、スミコにはあったということは思ってもみなかった。しかし、ヒロミは思い出した。そうだ、ヒロミもウサギの餌を得るために、ランドセルを置いて陽のあるうちに、とかお休みの日に野に出かけて行ったことを。家でウサギを飼っていた時期があったのだ。

あの頃は囲(まわ)りの道、裏の田んぼの畦道に、際限なく雑草があった。雑草の中に埋もれ、雑草の中で育ったと言っても言いすぎではないかもしれないとも思った。

それではどんな草を採りに行ったか。というとスミコのように直ぐ名前が思い出せない。しかし映像としては、たんぽぽ、オオバコ、シロツメ草だったかもしれない。裏道は当然、すべてのように雑草に覆われていた。

餌を採りに野に行くことが、遊びのひとつに教えられていたかもしれない。ヒロミは野性的だったと言える

だろう。しかし、その記憶の奥にひとつの暗い部分があったことを忘れない。

ウサギが弱ってきたと父が洩らしていたときがあった。まもなくそれが食卓にあがった。男の人ってずいぶん残酷なことをするものだ。とそのとき恐怖に似たものを感じた。しかし一方で、そのお皿をつついている自分が確かにいた。豚肉や牛肉の代わりだった。

ウサギの両目は透明なルビー色。白いフサフサした身体に、その色は何とも印象的な色だったとヒロミは何故か供養のように考える。

白の記憶がもうひとつあったことを思い出した。その中に小さな秘密があった。

飼っていたニワトリが卵を産む瞬間だった。ヒトリ時間を過ごす中で生まれたものだ。

住まいの裏にニワトリ小屋があり、その中に数匹のニワトリがいた。餌は草でなく、専用の袋に入ったもので、確か有機物と書いてあったのかもしれない。カルシウムを取るための貝殻をつぶしたような物が入っていた。

ニワトリが水を飲む行為も面白かったが、更に興味を抱いたのは卵を産むその時だった。今まさに卵を産もうとするとき、ニワトリは立ち止まり、ひたすらおしりを地に近づける。おしりが地とすれすれになったところでポトリ、と真白い卵を傷つけないように産み落す。気持がいいのだろうか、その時目をうっすら閉じ、官能的な表情をあのホソオモテの顔に瞬間浮かべる。産み終った後は、例のコッココッコと軽快な鳴き声を発しながら歩きまわる。人間のように産後などというものは、もちろんない。卵を産むために、めんどりはあるだろうが…。ヒロミはその一部始終を小屋の金網の外で見ていた。

再び、白の記憶のヤギに戻ろう。あのセンセイが赤子の頃、ヤギの乳を飲んで育った。この間、ふとセンセイはつぶやいた。ボクは母親に育てられたと思っていないと。ヤギの乳と直接結びつかないにしてもヒロミには気になる一言だった。

偶然スミコから聞いたヤギのミルクの意味、長い長い見えない帯のような時の経過を、初めて聞くその意味。

今、それを手にしようとは思ってもみないことだった。何とうかつなことであったか。
ムトウもヨウコもヒロミも同じ文学仲間で、そこにセンセイが加わる。共に会することはないが、水が迸(ほとば)しるように話は文学を中心に流れて行く。
相変わらず隔週に一回、ナカダ治療所に通う日が続いている。ハリ治療がこんなに続くことはない。元の躰になることはもちろん論外だが、頭が良くなるよう、美人になるよう、それは冗談で始まったことだが、センセイはそれを忘れず、治療の最後にはおまじないのようにしてくれる。
ピース（ｐｉｅｃｅ）を求め、彷徨しているうちに、つかもうとしているのが別のピース（ｐｅａｃｅ）だったかもしれない。いやいや、それは儚い夢のまた夢。
ハリ治療は、まだ続けられるだろう。